

# 聞名仏教

第 141 号 毎月発行  
(発行日) 2022 年 6 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
[mail:nenbutuji6@gmail.com](mailto:nenbutuji6@gmail.com)  
郵便振替「東本願寺護持基金」  
00930-7-146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## あてが違うた

佐々木蓮磨

われわれの先輩に、今井昇道という信仰の深い非僧非俗の方がおられました。近代において徹底した同行を育てたという点においては、この今井昇道師の右に出る人は少なからうと思えます。

師は愛知県の鷲塚わしづかというところに草庵を占めて、有縁の同行と談合をつづけておられたのであります。

あるとき師が申されるには、「古来、法然聖人にしては、親鸞聖人にしても、臨終ぎわがまことに立派である。また一般の同行の中でも、有名な信者とか妙好人とか言われておる人たちの臨終も、おしなべて立派である。すると、一般の同行たちの心中に、一抹の不安が残るように思われる。たとい親鸞聖人は『臨終の善悪をば申さず』と言っておられても、実際においては、

信仰深い人々の臨終が立派であるということになると、あまり悪い臨終ぎわでは往生がどうであろうか、という心配の起ころのは当然である。そこで自分は念仏も称えず、苦しみ悶えながら死んで、凡夫往生の手本を残したい」と。

ところが、その後、師が大病にかかり、死が目前に迫ってきたとき申されるには「自分はあてが違うた」と。

そこで看病している人たちが「あてが違うたとは、どういうことですか」と尋ねると、師が言われるには、「私はかつて『自分の臨終には苦しみ悶えながら死んで、凡夫往生の手本を示したい』と言っておったが、いよいよ病いが重くなつて、死を覚悟せねばならぬようになつてくると、喜びが胸にこみあげてきて、一生造

悪値弘誓・至安養界証妙果のご文が思い出されて、感涙にむせぶほかなかった。いよいよ凡夫の計らいではどうにもならぬ、喜ぼうと思つて喜ばれるものでもなく、喜ぶまいと思つて喜べぬようになるわけのものでなく、人間以上の偉大なお力が然らしめて下さるといふことを、痛切に感ぜしめられるのみであつた」と。

この今井昇道師の述懐は、まことに尊い宗教経験であると思ひます。

大谷派の先哲香樹院師は、学問と信仰とを兼ね備えた稀に見る名師でありましたが、晩年に到つて「人間というものは、いかに他力の信を得ている人でも身体が健康であるときは、それに伴うて、煩惱妄念の雲霧も深いゆえ、摂取の心光を拝むことはでき難いが、娑婆の縁がつきて、人間の体力

が衰えてくると、如来の攝取心光が、いよいよ明らかになり、疑うことができないようになり、おのずから大涅槃の証りを開かしめられるのである」と申されたそうです。

まことに親鸞聖人が「娑婆の縁つきて力なくしておぼろぎのときに彼の土へ参るべきなり」と仰せられたように、人間の力が死の近づくにつれて、次第に弱つてくると、それに引きかえて法の力が増強して下さるのではないのでしょうか。

求道青年長谷川次郎君が、自分の病いが不治であると知つたとき「無限の喜びを感ずる」と言つて合掌したのも、同じ信境だと思ひます。なんという、スバラしい現象ではありませんか。

(了)



# 現代真宗問答 ⑥

え方ですか」  
A 「いわゆる、目に見えないもの、耳で聞こえないもの、手で

A 「ええそうです。自然科学的な物の見方の基本的なスタンスは、あらゆる現象に対して、それを観測者の外に置いて観察し、分析し分類して知るといふ、そしてそこに一定の秩序なり法則性を見出すという姿勢ですが、そういう場合、あらゆる現象を観察する見方というの、どこまでも現象を自分の外に置いて知る見方です」

対象を（観測する人に対して）対象化して理解する見方、これが自然科学の見方の基本です」  
B 「こういう見方で自然の活動を捉えてきたのですね」  
A 「ええ、そうです。これが支配的といつていいほど展開してきたのが現代です」  
B 「こういう見方に対して、この見方はなお相対的であつて唯一の見方ではない、絶対的な見方ではないといわれるのですね」

B 「現代真宗ということですが、なぜ現代と名づけられているのですか」

え始めたヨーロッパで十七世紀あたりからです」  
B 「現代はこの見方が支配的ですね」

触れることのできないもの、実験的に検証しデータ化しえないものは存在しない、という考え方であつて、これが人々の考えの中心の座を占めるようになっていくのが現代の大きな特徴といえましょう」

A 「ええそうです。自然科学的な物の見方の基本的なスタンスは、あらゆる現象に対して、それを観測者の外に置いて観察し、分析し分類して知るといふ、そしてそこに一定の秩序なり法則性を見出すという姿勢ですが、そういう場合、あらゆる現象を観察する見方というの、どこまでも現象を自分の外に置いて知る見方です」

対象を（観測する人に対して）対象化して理解する見方、これが自然科学の見方の基本です」  
B 「こういう見方で自然の活動を捉えてきたのですね」  
A 「ええ、そうです。これが支配的といつていいほど展開してきたのが現代です」  
B 「こういう見方に対して、この見方はなお相対的であつて唯一の見方ではない、絶対的な見方ではないといわれるのですね」

A 「それは現代には特有の問題意識があり、それに応じるという意図からです」

A 「ええ、この見方が宗教にも大きな影響を与えてきて今日に到っています。そして神も仏も信じない、という人たちが近代社会では増えているのはいうまでもありません」

B 「「自然科学的な見方」と言われましたが、この見方がものごとを知る全てではないという含みがあるのですね」

A 「ええ、真宗（仏教）に対して同じで、アミダ仏や浄土に対しても否定的な見方あるいは懐疑的な見方が当然増えるわけですよ」

A 「ええ、自然現象なりを観測し認識するという場合、どこまでも知性によって認識する人間の認識形式あるいは認識能力という制限があつて、それでもつて自然現象を捉えている。それによつて捉えられたものは、人間の知性的認識能力の範囲内のことであつて、人間の知性の認識能力では捉えられないものが当然あるはずですよ。また外の現象を人間知性による認識形式（時間空間での因果の形式）で捉えますから、それは色眼鏡で自然を見るような見方で

A 「近現代の大きな特徴は自然科学の発達による自然科学的な見方が私たちの物の考え方に大きな影響を与えてきたことです。自然科学的な見方とは、実験し観察することによつて見出された物質の現象を実在とし、それ以外の観察し測定しえないことに対しては実在性を（認めない）か（分らない）かであつて、確かな存在とはしない、という見方です」

B 「「自然科学的な見方」と言われましたが、この見方がものごとを知る全てではないという含みがあるのですね」

B 「「自然科学的な見方」と言われましたが、この見方がものごとを知る全てではないという含みがあるのですね」

A 「ええ、真宗（仏教）に対して同じで、アミダ仏や浄土に対しても否定的な見方あるいは懐疑的な見方が当然増えるわけですよ」

A 「ええ、自然現象なりを観測し認識するという場合、どこまでも知性によって認識する人間の認識形式あるいは認識能力という制限があつて、それでもつて自然現象を捉えている。それによつて捉えられたものは、人間の知性的認識能力の範囲内のことであつて、人間の知性の認識能力では捉えられないものが当然あるはずですよ。また外の現象を人間知性による認識形式（時間空間での因果の形式）で捉えますから、それは色眼鏡で自然を見るような見方で

B 「こういう考えは昔からあつたのですか」

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「自然科学的な見方というのは具体的にどういう考

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「自然科学的な見方というのは具体的にどういう考

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「自然科学的な見方というのは具体的にどういう考

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「自然科学的な見方というのは具体的にどういう考

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

A 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

B 「あつたでしょうが、これが大きくクローズアップされ始めたのは、自然科学的な見方が社会に影響を与

え方ですか」

え方ですか」

え方ですか」

え方ですか」

え方ですか」

あつて、なお限定された自然のすがたであるという批判があります」

B 「そうすると人間が知的に認識した自然は、人間の認識能力の範囲内の自然であつて、自然そのものの、ありのままの相<sup>すがた</sup>とは言えない、ということですね」

A 「ええ、自然の真相だとは必ずしもいえないと言えましょう。かといって全く空想というわけではありません。自然そのものの一つの現れといえましょう。譬えて言いますと、光をプリズムにあてますと色々な色として光が現れます。赤色の光、青色の光、黄色の光など、それぞれの光は光そのものの限定された光です。限定された光ですが、光でないとはいえませんが、光に違いない、しかし光そのものの全体ではなくてある限定された姿です。そのように自然科学で観測し見出された自然現象の姿は自然そのものとはいえないが、自然の限定された姿だといえます。ですからウソではない、空想ではない、実際に

存在するけれども、それが自然の真相そのものとはいえません」

A 「すると、自然そのものを違った認識方法で捉えるならまた違った姿を自然は表わすことになりますね」

B 「ええそう思います」

A 「では、話を宗教のことに戻りますが、神とか仏とかの存在に対してはどうなのですか」

B 「自然科学的な認識方法で神や仏の存在を知ることができないということですが、神や仏を人間の観察的分節的な知性で知るという方法では捉えられないということとです。ですから自然科学の方法で神や仏を論じると、必ず「神も仏もあり得ない、あるいはあるかどうか分からない、認識されないから」という結論になります。人間の観察的あるいは分析的な認識方法、それを仏教では分別知といいます」

A 「その分別知ではアミダ仏を認識することはできないとなると、私たちはどうしたらアミダ仏を知る、あ

るいは仏にあえますか」

A 「これが大変大きな問題です。有難いことにこれに関して釈迦如来が説いて下さった説法『仏説無量寿経』の中に、人間の分別知からはアミダ仏を知ることができませんが、アミダ仏の方から人間に対して働きかけて下さっている、そういう働きによって人はアミダ仏の働きを知ることができる、そういう道を説いて下さっています」

B 「人間の側から仏を捉えるのは無理であり、不可能ですが、アミダ仏の側からの働きによって人は仏を知ることができる、といわれるのですね」

A 「ええそうです」

B 「ではそのようなアミダ仏の側から私たちへの働きとは何ですか」

A 「それはアミダ仏が言葉となつて喚びかけて下さる、その言葉によつてです」

B 「その言葉を聞いて人がアミダ仏を知ることができ

るのでですね」

A 「ええそうです」

B 「それはどのような知り

方ですか」

A 「アミダ仏の喚びかける言葉を聞く、そこに分別的ではなく直接的に知らされる、といえましょう」

B 「アミダ仏の喚びかける言葉とは」

A 「南無阿弥陀仏のみ言葉です」

B 「どこでアミダ仏の言葉を聞くことができますか」

A 「まずは南無阿弥陀仏と称えてみることで。そうすれば南無阿弥陀仏の声が耳に聞こえます。これがアミダ仏が具体的に私たちに喚びかけたもう言葉です。この言葉を聞きつつ、この言葉に示されている仏心を聞くことによつて、私たちはアミダ仏を知るのです」

B 「繰り返しますが、アミダ仏は私の対象として捉えられる仏ではないのですね」

A 「ええ、アミダ仏の働きは対象的な領域にも当然働いていますが、そういうアミダ仏はまだ私の外なるアミダ仏です。離れています」

B 「私に喚びかけたもうアミダ仏は何処にましますか」

A 「私と離れない、離れないどころか実は私の真実の主体がアミダ仏であり、そのアミダ仏の働きは今この私を包んでいる、掴んでいる、撰取しているナマのアミダ仏です。私と一つになつていたもうアミダ仏です。ただ、このアミダ仏を

私たちは見失っているのです。この私たちにアミダ仏は南無阿弥陀仏として喚びかけたもうことによつて私にであいたまうのです」

B 「この南無阿弥陀仏の喚び声によつてアミダ仏にいうことができるですね」

A 「ええそうです。アミダ

仏は対象化され得ないですが、しかし私たちと一つになつて下さっているアミダ

仏が、南無阿弥陀仏と喚んで下さるお声を聞くとここに、このアミダ仏にいうことが

できるので。これは、考えてとか分析してとかではなくて、実感的にと

か、直接的に、あるいは直観的に知るといふ知り方といえるでしょう」

# 質問に答えて

聞法者からの三つの質問。

一。「南無阿弥陀仏には、私を仏にする力が本当にあるのですか」

阿弥陀仏は寿命無量の働きであり、光明無量の働きです。まず、このことを踏まえた上で申します。私たちのいのちは無量ではありません、有量です。ですから、私たちは無量の阿弥陀仏のいのちの中にあります。もし私たちのいのちが阿弥陀仏のいのちの外にあるなら、阿弥陀仏は無量のいのちではありませんから。そこで私たちは阿弥陀仏のいのちの中にあり、阿弥陀仏を離れて存在し得ません。阿弥陀仏に抱かれています。存在です。阿弥陀仏と私は一体不離なのです。ただこの真理を見失って、私のいのちを我が物として執着している、そこに迷いがあるの

から、私を仏にする働きがあるといえるのです。

二。「法蔵菩薩の物語は本当ですか」

法蔵菩薩の物語は、阿弥陀仏と人（衆生）が摂取不捨の真理の中におかれていて、という有難く深甚な真理を知らせて下さる表現です。摂取不捨の真理をこういう如来が説いて下さったこと

によって、この真理の有り難さ、恵みの深さを私たちは感じ取ることができるようです。阿弥陀仏は真理であるとともにこの真理を私たちに与えよう、目覚ましめようと無窮に働いて下さり、仏の言葉となって喚びづめに喚んで下さる大悲の働きです。この働きにこもっている大慈大悲のお心を、《法蔵菩薩の願行とその結果》という因果の形式で私たちに大悲のお心の深く広大なことを知らせて下さいます。それが法蔵菩薩の物語です。人は論理より、大悲の物語によって人の心の芯に大悲

が感知されてくるのです。

人の心の深部に届くのは「阿弥陀仏のなさけ」なのです。大悲の情にふれて人は阿弥陀仏のお心に感応し、その

お心によって頑かたくな私の心が仏のお心に開かれるのです。法蔵菩薩の物語は歴史的な史実を述べているのではなくありません。摂取不捨の真理が、「我が名を称えよ、汝を引き受ける」という法蔵菩薩の大悲のお心として表されるところに、大悲の情が伝わってくるではありませんか。この「大慈大悲のあわれみ」が自我に固執している邪見傲慢な我が心を開き、大悲が我が心に入って下さるのです。

三。「私の心は疑いしかありません」

私の心に疑いしかないと本当に知らされたら、いよいよ「我が名を称えるばかりで助ける、その外に何もいらない」という大悲の本願（仰せ）に帰するほかにいではありませんか。（了）

## 【住職雑感】

二年半も前にな

るが、湿疹しっしんができて昼夜を問わずかゆみに襲われ、睡眠不足が続く。

特に睡眠中によく掻くので「掻いたらいけない」という医師の話を思い出して手袋をして寝るようになり、掻きむしるようなことはしなくなりました。そうしたら不思議にかゆみがかなくなりなくなっていたのである。

現在もかゆみは多少あるが大変少なくなりました。五月二十三日の新聞に「掻くと増すかゆみの原因はタンパク質」という見出しの記事があり「掻くと炎症を起こしさらにかゆみが増す、その原因は掻くと（scratching）というタンパク質が増え、さらにかゆみが増す」ということを九州大の研究チームが発見したという。ただし、かゆいのを我慢するのははなはだ難しい。こういう時、龍樹菩薩の「たとへば疥はたけ者の、猛焰もうえんに近づきて、初めはしばらく悦ぶといへども、後には苦を増すがごとし。食欲の想もまたしかなり。始め樂着すといえども、遂には患わずらい多し」という言葉を思い出す。かゆいとはじめは気持ちよいがそれがさらなる苦痛を生む。同様に、食欲が少しでも充たされると始めは楽しいが、それがさらなる煩いや苦痛を生むことが多い。食欲を減らすところに本当の樂があると菩薩は言われるのであろう。